やり抜いてこそ、新たなトビラは開かれる。

夏をいっそう熱くしたリオデジャネイロ五輪が幕を閉じた。全28競技306種目の中でも、とりわけ世界中の視線を集めたのは、今大会から正式種目となった7人制ラグビーだろう。日本代表の闘いぶりは私たちに勇気を与えてくれたが、出場選手以外にもピッチに立つことを許された日本人がいる。審判員を務めた帝京大学の卒業生、川崎桜子さん(22)だ。

五輪で女子セブンズの試合を裁いたのは、世界中にいる審判員の中から選ばれた12人。その1人として抜擢され、日本人初の女子審判員となった川崎さんだが、今年の3月までは同大学のラグビー部に在籍していた。それも"プレーヤー"として入部したというから驚く。

「高校の部活ではマネージャーを買って出るほどラグビーが大好きでした。大学に進学しても離れたくないと思い、入学と同時に門を叩いたのです。しかし、すぐには監督の許しを得られませんでした。トレーナーを希望したのですが、"1年間大学の勉強をしっかりする"ことが条件だったからです。私は待ち切れず何度もお願いに行くと、監督から"そんなに好きならやってみなさい"と承認していただきました」

負けず嫌い。新しいことには俄然チャレンジしたくなる。そんな持ち前の性格から川崎さんは、覚悟をもって同部初の女子選手となった。男子選手とほぼ同じ練習メニューをこなす日々の中で、培われたiSM(イズム)があるという。

「技術や体格で劣るのは否めません。だから練習では死ぬ気でついていこうと『とにかくやり抜く』が今も私の信条です」

どうすれば試合に出られるか、"自ら考えて行動する習慣"も身についたと川崎さんは当時を振り返る。しかし1年目が終わる頃、大けがを負う。このことが審判員転向のきっかけになった。

「レフリーへの転向は、監督からの提案でしたが、しばらく悩みました。踏ん切りがついたのは、自分のことばかり考えてきた自分に気づいたからです。チームに貢献できるならレフリーをやろうと思いました」

判定が難しいトップクラスの部内や他大学における練習試合で数々の経験を積み、日本ラグビー協会の女子審判アカデミーにも参加。3年次には世界大会に派遣され、在学中にオランダをはじめ10ヵ国のピッチで笛を吹いた。磨いたのは足の速さ、笛の強弱・音色、シグナルの美しさ。それが五輪で白羽の矢が立った理由ともいわれている。

この春、川崎さんは卒業と同時に山小電機製作所に入社。審判員活動の支援を申し出てくれた企業だ。仕事を終えるとジムで体を鍛え、週末は各地の試合を回る。

「支えてくれる方々に恩返しがしたい。その想いで五輪ではレフリーを務めました」

日本人の審判が国際舞台に立つことは、世界に対する日本のラグビーのアピールになる。そう話す川崎さんには、大きな目標がある。日本でラグビーを定着させ、競技者を増やすことだ。前例なき挑戦に立ち向かい、『とにかくやり抜く』ことで新たなトビラを開いてきたフロンティア精神に、息をつく気配はない。

帝京大学ラグビー部では2年生の夏からレフリーに転向。卒業の年には大学選手権史上初の7連覇を達成し、チームを支えた仲間と歓喜した。

入社した山小電機製作所の小湊清光社長も、15年前までラグビーのレフリーとして活躍。川崎さんの良き理解者であり、142人いる全従業員がサポーターだ。

普段は同社の企画広報室に勤務。審判員活動で年間60日以上席を空けるだけに、業務では高いレベルの成果や貢献を自らに課している。

帝京大学 TEIKYO 50th
本部広報課 TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1 http://www.teikyo-u.ac.jp/

信念が、世の中を変えていく。
iSM × フロンティア